

鼯 肩 について

—— 中世精神の一側面 ——

世に「判官鼯肩」ということばがある。辞書のおしえるところによれば、このことばは次のように説明される。

源義経を薄命の英雄として同情し鼯肩すること。転じて、弱者や敗者に同情する一般的な感情。『新潮国語辞典』

また、市古貞次の論文「判官鼯肩考」⁽¹⁾にも引用されているが、藤村作は『日本文学大辞典』『江戸時代文学』の項において、江戸時代の文学精神を象徴するものとして、義理・人情・因果応報など十二のことばを列挙し、その四番目に「判官鼯肩」を挙げ、

判官鼯肩は非凡人に対する崇拜尊敬と、不遇逆境に在るものに対する愛憐同情との合したもの

と述べている。これは「判官鼯肩」が単に同情の念を含むだけのものではないことを強調している点、『新潮国語辞典』の記述にくらべて、義経の英雄としての側面をより重く見ているものといえよう。しかし、いずれの説明も全く異質のものとはいえないし、また、他の辞典の説明するところも、この域を出るものではない。

鼯 肩 について

笹 川 祥 生

さらに、市古貞次は「判官鼯肩考」において、「判官鼯肩」について、勸善懲惡・因果応報の思想と連るものではあるが、単にそのみでは蔽ひ切れぬ本能的な国民的性格であったのである。このやうな国民性は、以上略説したやうに中世に於て夙に強烈であつて、特有の国民文学を生む原動力となつたのであるが、江戸時代以降も益々成長発展を続けていったやうに思はれる。

と述べている。

「弱者や敗者に同情する」感情が人の心に存在することは否定できない。義経に対して世の人人が同情の念をよせたことも考え得ることである。そのような感情を「判官鼯肩」ということばが象徴すると考えること、そしてそれが多くの中世小説の底に流れる思想であり、さらには中世より近世以降にいたるまでも日本人にうけつがれていった国民性というべきものと考えることには、根拠がないわけではない。敵対者の間でさえ、

弱者、劣者、敗者に対する仁は、特に武士に適はしき徳として賞讃

せられた。(新渡戸稲造『武士道』⁽²⁾五)

という理解からすれば、第三者が敗者に対して同情し、また同情する心を美德として称えるのは当然といえよう。

しかし、疑問を発する余地が全くないとはいえない。たとえば、市古論文において指摘されているように、「判官鼯鼠」ということばそのものは、現在知り得る限り、『毛吹草』に見える例がもっとも古い使用例であり、室町時代にこのことばが用いられていたという確証はない。これも市古論文において指摘されたとおり、中世には、「京都鼯鼠」という成語もあり、「鼯鼠」ということばにいたってはもっと古くから使用されていたにもかかわらず、「判官鼯鼠」ということばが用いられた形跡がないということには相応の理由があるかもしれない。もし、そうであれば、義経、あるいは一般的に弱者などへの感情を表現するのに、あえて「判官鼯鼠」ということばを用いることには多少の問題が生じる。



「判官鼯鼠」を論ずるためには、一応「鼯鼠」ということばについてふれなければならないであろう。詳細な考証を展開するだけの用意はないが、簡単に述べてみたい。

「鼯鼠」ということばが、はじめて日本人の識るところとなったのはいつごろであるか、確かにはわからない。ただ、すくなくとも、『文選』渡来とともに日本人の眼にふれたはずであるから、ずいぶん古いことになる。日本人自身も、やがてこのことばを使用するようになるが、ながらく『文選』の李善注に示された用法の域を出なかったようである。

すなわち、『文選』「西京賦」には

綴以二華、巨靈鼯鼠

という語句があり、李善は

鼯鼠、作力之貌也

と注している。次に平安時代における用例を若干挙げるが、いずれも李善の示した語義の範囲を逸脱するものとは思えない。「力を用いる、つとめる」(諸橋轍次『大漢和辞典』)という現代語訳を充てれば十分であろう。

是乃法花経神力 観音鼯鼠 更莫疑之矣(『日本霊異記』⁽³⁾下の一

三)

鼯鼠上比下音機反二合力起也是以山起力甚大力也(同前注)

縦雖鼯鼠一。非力所堪。(『本朝文粹』⁽⁵⁾四、大江朝綱「貞信公天皇

元服後辞撰政二表」、天慶元年八九三八)

鼯鼠無_レ力。蓬海之山在_レ背焉。(『本朝統文粹』⁽⁶⁾四、藤原敦光「富家

殿謝関白二第二表」、嘉承元年一一〇六)

鎌倉期における用例

我盍鼯鼠而裨官造二乎(『元亨釈書』⁽⁷⁾一四)

も、同様に解釈して差支えあるまい。

ところが、室町期に入ると、それまでとは異なる「鼯鼠」の用法があらわれたようである。たとえば、次にあげる例文にみられるように賄賂・属託のような悪徳と同列のものとして列举されたり、また、「不当」なる行為として断定されたりする。

奉行入賄賂衆中属託上衆秘計口入頭人内奏鼯鼠窺機嫌可申之(内閣

文庫本『庭訓往来』八月)

企^ニ無理訴訟^一。被^ニ棄捐^一之刻^ニ構^ニ奉行人之偏頗^一之条、殊無^ニ其所謂^一者也。将亦奉行若耽^ニ賄賂属佐^一、^{△ママ△}最^ニ肩一方^一者、太以不当也(『尺素往来』⁸)

すなわち、『本朝文粹』『元亨釈書』などにおける「最肩」は尽力という行為を意味して用いられるが、その行為に対する価値判断までは伴わない。すくなくともその行為が他から非難されるべきものだ、という意識はない。また、利害を異にする両者があり、その一方に肩入れをすることを意味しているわけでもない。これに対して、『庭訓往来』などの「最肩」には、不当に一方に偏した不当な尽力という感情を含んでいる。そして、この用例が当時において孤立していたものではないことは、次の例からも推しはかり得よう。

上杉あはのかみ^{憲実}うけ給て申けるは、天下あんをん国土ふにう成は当家しせいによつてなり。しかれども京都と御不和の御事しかるびやうも候はず。いにしへのいしゆをひるがへし京都と御和睦まし／＼て、若君の御元服都にて候はば、こく土いよく無事にして当家御はんじやうたがひなしと申上たりければ、かまくらどの気色もつての外に見えさせ給へば、上杉は面目をうしなふて御まへをまかり立、其後鎌倉どの近習の人々をめして房州いけんいかゞとおほせければ、をの／＼申けるは、上杉は京都ひるきにてかやうに申候なり。義教御事はみやこにましませば御威勢もいみじくましませども、若君のゑばしおやにめされん事心得がたう候。(『結城戦場物語』⁹)

最肩について

右の例の中で、「京都ひるき」は上杉憲実に対する非難のことばとして用いられている。「最肩」は当然尽力するべき主君の側(持氏側)に立つて事を処せず、かえって反対の立場に立つて不当な肩入れをしている、というほどの意味を担っている。しかも、「最肩」といふ感情には、同情乃至は哀憐の念を重要な要素として含むものである。(市古貞次『中世小説の研究』第三章)といわれているにもかかわらず、この例において「最肩」されているのは「御威勢もいみじくましま」す義教であり、とても同情や哀憐の対象とはなり得ない。もし、当時において「判官最肩」ということばが存在していたとしても、この「京都最肩」という例から類推するかぎり、辞書的説明のあてはまることばとして存在し得たかどうか疑問を持たざるを得ない。

◇

「最肩」が弱者や敗者に対する同情哀憐という、いわば美德を意味するものではなく、不当な肩入れ、といった悪徳を意味して用いられたことが、二三の往来物、あるいは『結城戦場物語』のみに見られる特異な現象であったとは思えない。『応仁略記』の序文をはじめとして、戦国時代になると、盛んに「偏頗」ということばと合わせ用いられる傾向にあった。これは、「最肩」が悪徳としての座を次第に確実なものにしていったことを物語るものではなからうか。

折に随ふ雑記の習、甲乙人等競ひ後れ、或は進み、或は退く。弓箭の道、事において定量なき歟。貴賤に付て、最肩偏頗の試を離れたり。あに偏執の思ひあらんや。只見聞の眼前による。此段虚偽にあ

らず、冥鑑照し給へ。『応仁略記』⁽¹⁰⁾

最良偏頗の横行は、

此土へ来る程の者に和田軍の起りを尋れ共、最良偏頗で定説が知れぬ（虎寛本狂言『朝比奈』⁽¹¹⁾）

と、閻魔大王をしてなげかせたりもするが、人間世界、特に武士の世界では、犯罪行為として、法度によって禁制されるにいたる。たとえば、毛利氏が元龜三年（一五七二）に発した掟の一箇条には次のように述べている。

一、不謂親子同名縁類、不可最良偏頗之事、⁽¹²⁾『毛利家文書』

一、法度に漏、緩怠之者、不可許容事、付、最良偏頗之事、

（同前）

「最良」が悪徳とみなされるようになった理由はいくつか考えられる。

不孝と云は、最良偏頗もなう、平均に一の如くにせう事を、さうせぬを、徳を二三にすると云、其事ぞ。『毛詩抄』⁽¹³⁾七

とあるように、最良偏頗が「平均に一の如く」にしないことであってみれば、漢文直訳式政治観あるいは道徳観からしても、当然否定されるべき性質のものであったにちがいない。

偏なく党無ければ王道蕩蕩。党無く偏無ければ王道平平。反無く側無ければ王道正直。其の有極を会せば其の有極に帰せん。『書経』⁽¹⁴⁾

「洪範」

最良偏頗が否定された背景には、こうした中国の古典の影響をみのがせない。それは『信玄家法』⁽¹⁵⁾の一節に

一、不可_レ人之最良偏頗_レ事

と記し、その後

孝経曰。天地不_レ為_二物_一枉_レ其時_レ。

云々と孝経の文句がそえられていることからうかがえよう。そもそも、『信玄家法』下の各条には、すべて中国の古典の語句がそえられている。それらの語句が、戦国武将の政治の上で大いに参考にされたことは想像に難くない。

しかし、単に知識として最良や偏頗が否定されたのではない。時代そのものが与えた影響を無視してはなるまい。



武士の行動がすべて恩賞とのみ不可分に結びついていたと考えることは、あまりにも一面的であろう。といって、かつて考えられていたように、武士が決して「崇高なる奉仕的精神」⁽¹⁷⁾あるいは「犠牲的精神」の権化ではなかったこともたしかである。たとえば、次にあげる例は、戦国武士の恩賞に対する、ひいては戦いに対する考えをよくあらわし得ているものといえよう。

板倉長門守被_レ申シハ。恩賞ヲ不_レ被_レ下ハ僻事タルヘシ。士卒陣ニ向テ命ヲ輕ンシ。謀ヲ成テ敵ヲ欲_レ討ント。恩賞ニ預ラン為也。『土氣古城再興伝来記』⁽¹⁸⁾

信玄公仰出され候は、信玄が（諸士を）思ふ事、各を思ふにあらず。只信玄が身をおもふなり。子細は、あのごとくなる兵共をあつめ多持候は、軍（に）かたんといふ事也。軍にかつは、国を取ひる

げんといふ事也。国（を）とりひろげてこそ、面々かた／＼諸人大小上下共に、加恩をくれてよろこばせんずれ。所領を取て、其上に又増知行を取、立身してこそ侍の本意なれ。『甲陽軍鑑』⁽¹⁹⁾品第一七）恩賞の厚薄を定めるのは「手柄」に対する評価の如何にかかっている。これ以外に、

才覚発明にして巧言令色を専らとせしかば、次第に立身して、大内家の政事渠が胸懷の外に出でず。『陰徳太平記』⁽²⁰⁾卷一八）

と評された大内義隆の寵臣相良武任のような例は少くないが、こうした戦場での高名以外の理由で恩賞に預ったり、増知行を取ったりすると、大体において後から紛争が生じることになる。またこの手柄の評価が、「ひいきひいきの取さた」に従い、「下の手柄を中にいひ中の手柄を上に申す」ことが横行するとすれば、どのような結果が生じるか。

信玄公仰出さるゝ、△中略▽諸人迷惑ながら機嫌をとり、出頭人親類共を用ひあがめ立るに付ては、△中略▽少身なるとぞま者は、何とよき事を奉公しても、大将の耳にいらす、扱悪き事あり共、類親広き近付、知音の最、多々ある者は、悪事を吉事と申しなし、左様の政にて、謀反の儀もかくして、悪事出来してから、大将の耳へ入る共、それは更に所詮なき儀なり。其源は出頭人の親類うかべてまはり、或ハよきひきもちたる奉公人共、下の手柄を中にいひ、中の手柄を上申す。又最、最なき者をば（上を）中にいひ、中を下にいふ事、ひいきひいきの取さた故、如此。此躰なる家中は、かならず大将はけて、内の者まかせと、分別仕れとて、信玄公各家老衆へ仰渡さるゝなり。『甲陽軍鑑』品第四〇下）

最 員 について

『甲陽軍鑑』でいえば、出頭人三浦右衛門佐のいうがままに、その身よりや氣に入りのものばかりが優遇された結果、「三河国大方敵とな」り、ついには滅亡への道をたどった今川氏真（品第一一）や、「半弓にて盗人をひとり射ころし」た高野聖に「手柄者」として、千貫の知行を与えるなど、「無穿鑿」のかぎりをつくし、

何たる手柄人をも小身なるをばいやしめ、小身にてもよき分別有べきをばそねみ、又出頭の上原すがの親類共、大身衆のよしみ、最、負をば何たる耄者をもそねまず。（同前、品第一三）

という氣風が家中に蔓延し、

一善ヲ廢スレバ則チ衆善衰フ、一惡ヲ賞スレバ衆惡販ス（同前）⁽²¹⁾とある古語の予言を地で行き、ついに家運を傾けてしまった上杉憲政など、「最員」のゆえに国をも家をも亡した例といえよう。

乱世にあつては、もちろん秩序の混乱には目にあまるものがあつた。しかし、そんな世の中であればこそ、なおさら、統制された集団はより強力に行動し得たのである。

ところが、戦乱の時代には、いかに主君の側から

奉_レ対_二屋形様_一、尽未来、不_レ可_レ有_二逆意_一事（『甲陽軍鑑』品第二二）と叫んでみても、家臣たちのすべてが、それを当然のことと受けとったわけではない。武士たちが離反・内通・裏切りを重ね、武将はそれへの対処に苦慮していた様子は、戦国の記録にも繰返し述べられている。毛利元就から隆元へあたえた教訓状の一節も、武将の切実な氣持を語っている。

一、当家をよかれと存候者ハ他国之事ハ不_レ能_レ申当国にも一人もあ

るましく候く

一、当家中にも人二より時々により候てさのミよくハ存候ハぬ者のミあるへく候（『毛利家文書』⁽²²⁾）

特に、在地の土豪である「国人」たちが内包する、とどまるところのない「不義」（『武道初心集』⁽²³⁾に「敵へ内通降参の不義」の可能性、「兎角国人どもの心不定」⁽²⁴⁾『雲陽軍実記』⁽²⁴⁾）という現実を、明確に認識するところから、元就の闘いは出発したのである。

善ニモ悪ニモ主君次第二成行ヲ。譜代ノ臣共。重代ノ家人トモ云。侍ハ渡り者ニテ。善キ国へ身ヲ寄せ。悪キ主君ヲ去ルヲ。渡り奉公トモ客臣トモ云也。（『豊内記』上）

「譜代ノ臣」に対しては、「善ニモ悪ニモ主君次第二成行」くことが求められ、「侍ハ渡り者」と渡り歩く連中よりも、きびしく忠誠を尽していたように理解できるが、実際には、戦国時代において「譜代」と、そうでないものとの区別が画然と存在していたわけではない。離反の可能性は各層の武士に存在していたのである。

このように帰趨常ない武士たちを、自らの指揮下にとどめておくためには、精神訓話もさることながら、恩賞に過不足を生じない配慮が特に望まれた。この処置を誤れば、反応は直ちに現れ、領国の存立を危くする場合もあり得ぬことではなかったからである。元就は、

当家の大将たらん人我等如此申置候儀を非に見て諸士の手柄の甲乙最負々々に穿鑿して新知加増を遣し或は戦場の功なき者共に当分氣に合たるとて何の穿鑿もなく知行を遣候事努々有へからず（『吉田

物語』一一）

と遺言したと伝えられる。元就が恩賞問題については死後のことまで気にしていたことが想像される。

支配者が「最負」を禁じた大きな理由は、決して道德観によって形式的に排斥されたというだけのものではなく、その行為が、一つの武力集団の存立を左右しかねない、といった情勢にあるとみるべきである。



「最負」が中世（戦国時代をも含めて）においては悪徳の一つとみなされたことは、前節で述べた。中世において、もし「判官最負」という成語が存在していたとするならば、それには、現在の辞書には見あたらない説明を付する必要があるのではないか。すくなくとも、「義経に同情する」あるいは「弱者や敗者に同情する」感情という説明を中世のことばとしての「判官最負」に付することには疑問が残る。

しかし、近世については、具体例も存在することであり、また時代も異なることでもあるので、中世に対すると同じ態度で処するわけにはいかないかもしれない。

そこで近世における「最負」の使用の様態を検討すると、中世における用法から全く外れて、新しい意味を獲得したともいえるようにである。

己れか党をむすび勢ひ猛ならん事を欲し、万ひいきのみにしてやはらける事なく（『塩尻』⁽²⁵⁾）

右の例、あるいは次の例においては、容認しがたい罪惡として非難され、まさに中世的用法の延長線上にある。

我儘依怙・最・肩内証の榮耀（『武道初心集』下）

依怙・最・肩などは毛頭仕るまじき物をと人々存ずる物に候（同前）

武士の文章におけるほどの深刻さはないにせよ、町人世界においても、「最・肩」には、常識的立場に立脚していない、というひけ目、あるいはうしろめたさを伴っていたことがうかがわれる。

あんまり気が能過から常日一夜かゝさんに叱られてばっかし居るはな。とっさんの最・肩をするじゃアねへが、傍で齒痒い様だよ。（『浮世風呂』⁽²⁶⁾二之上）

「最・肩ヲスルワケデハナイガ」と弁解しているのであるから、「最・肩」は他に対して憚りのある行為だとする感情がある。「気がよすぎる」とは常態であるとはいえないし、常軌を逸している「とっさん」を最・肩することも常識的とはいえないであろう。

何れも手前のおふ女郎のひいきをして、そなたはなんぼそうほめやっても、こちの大夫が口を袖にあてゝ笑ふけしき世界ひろしといへどもあるまじといへば、いや／＼それはそなたの不了簡といふもの、あの八橋がしり目で見た所が千金／＼と春宵いっこく女房自慢にてくらす所がたのしみ也（『ひとりね』⁽²⁷⁾上）

右の例では、一座の人たちが常識的になるほどとうなずくわけにはいかない、根拠の薄弱な評価のありかたをさして、「ひいき」ということばが用いられている。

この他、近世の文学作品その他の文献には、ここに挙げなかった「最・肩」の使用例が多く見出されること、もちろんである。したがって、わずかの例を示して結論を急ぐことは穏当ではなからう。しかし、ここで

は、最・肩するという行為が、いつの場合でも人々に何のこだわりもなく受入れられたわけでないことさえ明らかにできればよいと考えている。したがって「最・肩」の用例の羅列はこの程度におさめておきたい。

◇

そこで、ふたたび「判官最・肩」へ話題をもどすことにしよう。「判官最・肩」が、近世以降においても、「本能的な国民的性格」として「成長発展を続けていった」と仮定するならば、前節において挙げた「最・肩」の用例の場合とは異なり、「判官最・肩」が、ことば・精神ともに、ひろく国民の支持を受けていたはずである。この点、目新しい材料ではないが、『心中宵庚申』の例によって考えてみる。

此の度国元の留主の間に。八百屋半兵衛が母が嫁を憎んで姑去りにしたと沙汰有つては。萬々千世めが悪いになされませ。判官最・肩の世の中お前の名ほか出ませぬ。母の悪名立てて若い者の中へ頬が出されませうか。（『心中宵庚申』⁽²⁸⁾下）

半兵衛は「判官最・肩の世の中」をどう考えているのか。もし半兵衛が世間に判官最・肩の行われている現実を、あたりまえのこととして承認する気持を持っているものとすれば、「判官最・肩の世の中お前の名ほか出ませぬ」という部分は、たとえば次のように解釈されるのではないか。すなわち、「世間ノ同情ハ、追イ出サレタ嫁ノ側ニ集リマスヨ。弱者イジメヲスルケシカラン姑ダツイウ悪イ評判ガ立ツダケデスヨ。世間ガソウ考エルノモアタリマエノコトデスガ。」

これでは、判官最・肩を楯にとつて、半兵衛が開き直っていることにな

る。観客や読者が養母の言動からなにを感じるかということとはともかく、劇中において、半兵衛が養母をすこしでもたしなめたり、あるいは非難したりする気配は見えない。半兵衛は、古典大系の解説に指摘するように、「すぐれた分別を持つ彼でありながら、恩義を受けた養母のこととなると、まったく無策な屈従者と化してしまうのである」。もし判官最良が民衆の良識によって支えられている、という意識で、ここに持ち出されているとすれば、養母の行為は世間の良識に反するものといわざるを得なくなる。しかし、「無策な屈従者」である半兵衛はこの場において、いささかも養母を批判しているわけではない。この場において批判されているのは、「判官最良の世の中」でこそなければならぬ。したがって、「判官最良の世の中お前の名はか出ませぬ」というくどりは、「事ノ是非モ深く穿鑿セズ、通常弱イ立場ニアルト考エラレテイル者ヲ一方的ニ応援スルノガ世ノ常デス。コノタビノコトダツテ、内輪ノ事情モヨク知ラナイマニ、アナタノ悪イ評判ダケガ世間ニ伝ワルニチガイアリマセン。」とでも解釈するのが妥当であろう。『心中宵庚申』の例は、世間において判官最良が広く行われているという現実を明らかにしているとともに、それが正しいことではないと考える人間の存在していたことを示していると見るべきである。判官最良は、必ずしも、美德として国民の一致した支持を得ていた行為ではなかったようである。弱者に同情する、という感情が中・近世の人たちの間に濃厚であったとしても、その気風が「判官最良」と名づけられていたと単純に考えることには、一抹の疑念を抱く所以である。もし、「最良」ということばにかなりの重味をつけて考えるならば、弱者あるいは敗者に対する同情の

気持が、マイナスの効果をとまって発動する状態をさして、「判官最良」ということばが用いられたのではないだろうか。⁽²⁹⁾

◇

「最良」が中世においては悪徳とみなされ、近世においても、その余波をとどめていたことは既に述べた。しかし、すくなくとも中世に關していうならば、その事實は、国民がその行為を行わなかったことを意味するものではない。支配者が悪とみなし、また世間一般もそう考えていたとしても、「最良」によって生じる損害が大きければ大きいほど、「最良」を受けるものの利も増大するわけである。

また、次の例によってもうかがえるように、ことばによってひきおこされる感情は立場によって異なってくる。

切支丹宗徒たちは、この「殉教」という言葉を大変尊いものとしたが、異教徒たちは、この言葉を忌み嫌った。『戦国見聞記』⁽³⁰⁾宣教師ギズベルテスの報告書から)

「最良」の場合にも同じことがいえよう。「最良」をうける側にとつては、必ずしも悪徳であり、恥ずべきことである、という観念はなく、むしろ、不当な尽力だ、という非難を他から受けることを覚悟の上で後援してくれる人への感謝の気持がこめられる。『太平記』⁽³¹⁾に後醍醐のことばとして、

天下草創ノ功偏ニ汝等最良の忠戦ニヨレリ。(卷十一)

とある。体制・反体制という区分を行うとすれば、後醍醐は反体制（あるいは、体制の中の少数派にすぎないというべきかもしれない）側であ

り、後醍醐を後援することは「天下草創」の時期にあつては、決して社会一般に肯定された行為でなかったはずである。「最良」ということには、単なる助力という意味だけがこめられているとは思えない。また、中世末期にあつては、次のような例がある。

かうさうすよりも御文にて被仰候、定御書中にくはしく可被仰候、いつも御ひいきの衆、御上落自然おそく候は、御身上あしくなり候はんよし被申候事に候之間へ後略⁽³²⁾『伊達家文書』天正一八年二月二六日付、和久宗是書状

このとき、政宗のおかれていた情況は望ましいものではなかった。この年、政宗は氏郷とともに葛西大崎の余党を鎮圧していたが、家臣須田伯耆が氏郷に政宗陰謀の企みありと報じ(『藩翰譜』)、氏郷は浅野長政にこれを知らせている(『浅野家文書』五七)。こうした情況の下で政宗を後援することは、自らも与党とみなされる危険をとまなう。犯罪者を最良することは、犯罪者と同罪とする規定も武家の法度に明文化されているのである。(『信玄家法』「毛利氏掟」など)。それにもかかわらず最良をする人たちは、不当な尽力だという非難を充分覚悟の上で後援してくれる人たちである。「御ひいきの衆」ということばは、そんな内容をもつことばとみるべきであろう。

最良が悪徳として指弾される一方では、それを臆面もなくやってける人たち、そしてそれを期待する人たちが少なからず存在していたという事実は、中世(とくに後期)の精神を語る上で、見逃せないことではないだろうか。そもそも、武家の法度などで、くりかえし、最良という行為を排斥しているということは、最良が横行していたことの裏返しで

あると考えざるを得ない。そしてそれは、絶対的な權威の存在を否定し、自らの信ずる価値判断にしたがつて行動することによって、自らの世界をきりひらいていった中世人にしてみれば、当然の成り行きではなかったか。そういう意味では、「最良」を、中世精神の一つのあらわれとうけとることは理にかなっているといえよう。

しかし、さらに言えば、「最良」が、数々の非難にもかかわらず、現実には横行していたこととともに、謙信の言として伝えられている次のことば、すなわち、一応は最良を否定しながらも、目的によっては、それを活用することを躊躇しなかった態度にこそ、中世における徹底した現実主義精神の反映を見るのである。

公の曰、国郡を領する大将、其下の出頭人、或は横目、或は目代、是等の輩最良過るときは、政道必邪に陥べし。但士大将足輕大将の如きは聊最良有ても苦しからず。夫とても大事成依怙は勿体至極也。子細は士大将者頭只一偏に直なる計にては、組子の思ひ著薄き者也。然ば吾組下の族には、少の依怙最良一段宜かるべし。是は愚なる者を和合なさしむる為也と宣ふ。(『北越軍談付録』⁽³³⁾卷一「謙信公語類」)

注

- (1) 『国語と国文学』昭和二〇年六・七月合併号。
- (2) 岩波文庫本(昭和一三年)による。
- (3) 古典文学大系本による。
- (4) この語釈はもと割注。
- (5) 国史大系本による。この表は『朝野群載』にも収められている。

- (6) 同前。
- (7) 同前。
- (8) 新校群書類従本による。
- (9) 同前。『上杉憲実記』（織群書類従本による）には「皆云管領ハ京都ヲ最負仕候間。心ヲ置レ御間可被成。」とある。
- (10) 同前。『応仁略記』は、序文を信ずれば、応仁元年（一四六七）十月の著作。
- (11) 岩波文庫本による。
- (12) 『大日本古文書』『毛利家文書二』四〇四。その他、『塵芥集』（天文五年八一五三六▽伊達植宗）と『長曾我部氏掟書』（慶長二年八一五九七▽）の例を左に掲げておく。いずれも『中世法制史料集』による。
- 一 とかにんをうつつとき、ひいきのやから、いかほとうちそへ候とも、うたれたる者のふうんたるへし。（『塵芥集』一三三條）
- ひやうちやうしゆかたひいきをなし、ふせうのともから申ところ、おほひかくすに付ては、このはうれいをやふるかことし。（同前、敬白起請文）
- 一 國中諸事行井庄屋。何篇毛頭、偏頗、非道之儀。於ニ申扱者。其在所中。其外何之者によらず聞立。為ニ内々ニ具於言上仕者。可レ加ニ褒美一。
- (13) 岩波文庫本による。
- (14) 世界古典文学全集『詩経国風・書経』（筑摩書房）の書き下し文による。この部分は『帝範』にも引かれている。
- (15) 新校群書類従本による。
- (16) 同前。
- (17) 河野省三『日本精神史講話』（昭和一四年）。
- 武士道に於ける此のやうな崇高なる奉仕的精神は、一方に於いて、所謂武士のなさけとして發達し、其の純潔な奉公の信念と相待つて、世に武士道の犠牲的精神と称せられるところの、忠義と勇氣と節操と任侠とを打って一丸とした魂となるのである。（一八一頁）
- (18) 続群書類従本による。
- (19) 戦国史料叢書本による。明暦本を底本にし、（一）内は『甲陽軍伝解』によって補ったもの。
- (20) 通俗日本全史本による。
- (21) 『軍鑑』には「古語ニ曰ク」とあるが、「三略」を出典とする。
- (22) 『大日本古文書』『毛利家文書』
- (23) 岩波文庫本による。
- (24) 松陽新報社刊本による。
- (25) 随筆大成本による。
- (26) 古典文学大系本による。
- (27) 同前（『近世随想集』）。
- (28) 同前（『近松浄瑠璃集』上）。
- (29) 市古論文にも引用してある『毛吹草』の句
- 世や花に判官最負春の風
- の解釈について、別案を示しておきたい。すなわち、市古論文には一句の意味は美しい櫻花が心なき春風にはかなく吹き散らされるのを、ちやうど不遇の英雄義経に最負し同情を寄せるのと同様な氣持を以て、世人挙つて愛惜したといふのであらう。
- とある。これを
- 世間ハ花ニ埋マツテイル。ソノ花ヲ春風ガ早ク散ラセタリ遅ク散ラセタリシテイル。（ドノ花モ遅クマデ咲カセテオケバヨイノニ）。
- と釈することはできないだろうか。
- 『中華苦木詩抄』（寛永一〇年板）には、春の花の開くの遅速あることをうたつた横川の詩のうち、「主人若し春の権柄を掌らば万紫一紅一度にひらかしめん」という句について、「吾レ若シ。天道ノ如クニ。花ノ権柄ヲ。持ナラハ。サヤウニヒイキ偏頗ヲシテ。花ニ遅速ヲハ。アラスマイソ。」という意味だと試明している。このことから考えて、落花にも遅速があるのだから、その遅速あることを、春風が何のわけもないのに最負をするからだ、とくらみに思っている。という氣持ではなからうか。
- (30) M・クーパー、金田雄次共編『南蛮人戦国見聞記』。泰山哲之訳による。

(31) 古典大系本による。

(32) 大日本古文書家わけ第三、『伊達家文書二』五六九。

(33) 戦国史料叢書本による。

なお、傍点はすべて筆者がうった。

(一九六九年九月四日受理)